

全国 長南会 通信 67号

事務局 : 300-0301 茨城県稲敷郡阿見町青宿 930 長南秀則 TEL/FAX

発行日 : 令和02年12月20日



巨星相次ぎ逝く 我等長南家一族にとって悲しいニュースが相次ぎました。 長南俊春

中村就一氏

一族の歴史を繙いてくださった中村さんが7月末に逝去されました。97歳でした。知らせが通夜告別式が済んで暫く経ってからでしたのでご焼香に伺えず残念な思いではありました。11月24日に副会長、事務局長と4名で墓地に同行し焼香をして来ました。

一族を語る会や一族の歴史を調査することで何度か同行しました。若い時から事ある如、時間の許す限り同行しておりましたので極めて残念です。

一族の歴史を繙くことや「長南氏の研究」の本出版に当たっては私的な時間のほとんどを費やし我ら一族に投下されました。また、長南和泉守400年祭、菅原道真1000年祭、長南忠治800年祭等の事業を企画、開催されました。

全国長南会通信を中村さんが始められ、晩年現事務局長の秀則氏に委ねられました。新会報が出ると秀則さんと一緒に持参しお見舞いに伺っておりましたが、それもなくなりました。

只々ご冥福をお祈り申し上げます。

齋藤 武夫 氏

江戸末期の戊辰戦争の折、寒風沢出身の長南平七さんが、齋藤さんのご先祖宅に救われ、苗字を齋藤と名乗ることとなり今日に至っております。武夫氏の弟勝重氏が、寒風沢島で長南和泉守の倒れていた墓標を発見したことから墓標の改築、和泉守と長南町を離れ寒風沢に同行した家来たちの墓も一緒にしました。更には瑞巖寺の境内に栽松記念碑の建立と一連の行事に絶えず多額の御出資をいただき今日に至りました。

中村さんの入所後は秀則さんと小生の相談相手として、お会いしていただきましたが、それも叶わなくなりました。

只々ご冥福をお祈り申し上げます。

9月1日 91歳逝去

長南 勘一 氏

和泉守が黒松を260を超す松島の島々に植え、何代目かの子孫の松を長南町の熊野神社、長福寿寺に献木(2007/05/13)



するに当たり、塩竈市の勘一氏が移植されました。移植後に数回現地を訪ね、その後の様子を見ていたという話を聞いておりました。

その後、勘一氏と話す御度に、中村さんにもう一度会いたいと何度も聞いておりましたが、それも叶わなくなりました。

今頃は黄泉の国でお互いに語り合っているかもしれませんね。

只々ご冥福をお祈り申し上げます



中村さんのお墓は千葉県船橋市の市営馬込霊園にあります。生前に建てたそうです。広い敷地の静かなところで眠っています。(2020/11/24)

わが人生を決定したもの

中村就一

この正月で90才になった小生は、目も耳もかすみ、全く人間の能力を失ってしまったのでハタと困った。なにしろパソコンのワープロでさえ使い方を忘れてしまったので、さんざんいじってみたもののダメで、筆書の原稿となった次第。

でも会員の方には今さらと笑われるかも知れないが、全国長南会の運動について、この機会に振り返って報告することも意味があるかもしれないと思った次第である。

小生は学生時代に肺結核で休学したが、近所の老翁がニワトリを飼って卵売りの生活をしているが、本職は占いだと聞き、興味をそそられて訪ねた。

翁は分厚い和書をめくり、ソロバンをはじき、やがて語った。

「お前の病気は来年6月13日に治る。それから大きな仕事をするから忙しくなる。」その日は11月だったから、なんと半年後の予言である。半分頭を傾けながら翁の許を辞した。

当時は高崎郵便局に勤めていたから逡巡診療所の内山医師が往診してくれていたが、その頃のある日に「君の病気は治った。来週から歩いて診療所に来なさい。」と言った。当時はストレプトマイシンは未だ発明されておらず、結核はいずれ必ず死に至る病として知らされていたからおどろいた。

しかし翁の予言どおりなのには、改めて6月13日という日付に目をみはった。



翁はいかなる技術でこの日を予言できたのか。小生はすぐに翁の所へゆき、予言の的中について尋ね、その技術を教えてほしいと頼んだが、翁は「ワシは、この年まで後継者を求めてきたが、徒労だった。」という。でも念のために、小生の生年月日などを聞き、分厚い本をめくり、やがて、「残念だが、お前にはその才能がない。」と言う。がっかりしていると、「それより、お前は伊勢神宮にお参りしたか。」と聞くので否定すると、「お前はいずれお参りする。」と告げた、神宮の神様はお前をかわいがっていると言うのである。

翁はその後間もなく連れ合いの老妻を榛名山のふもとの実家に帰したあと、ニワトリを処分したお金をもって町会長に「ワシは間もなく死ぬから、この金で葬式を頼む」と差し出した。

その日に、翁は座禅をしたまま死去したという。



学徒動員

当時、学生は在学中は徴兵延期されていたが、沖縄へ米軍が猛攻をかけ始めた頃には、その余裕もなくなり、学徒動員となった。昭和18年12月1日、小生は宇都宮市の輸送部隊に徴兵され、トラックの運転訓練を受けた。ところが年が明けるとすぐ「お前らは強運だ。」と教官に告げられ、ポカンとしていると、「お前らはガダルカナルの戦線に行くことになっていたが、ガダルカナル島は撤退と

なった、行き先がなくなったからどこへでも行け。」と宣言された。これが軍隊かと驚いたが、ウソではなかった。

なぜか小生は気象部隊にあこがれがあったので、その通りとなったが、転属前夜に航空通信に変わったと告げられた。ところが隣のベッドの候補生が「オレ航空気象に変わった。」と言うので、持っていたテキストを交換して翌朝、軍用列車で南へ向かった。

あとで知ったことだが、彼の父親で県内のバス会社社長が、部隊長に頼んで、息子の行き先を小生と替えたのだった。航空通信と聞いててっきり飛行機に乗るものと決めて、心配しての行動だったが、替わった小生が着いたのは基地用大型無線の部隊だった。

そこで4ヶ月トンツーの訓練で閉口した。どこでもそうだが、週番士官が交替すると、毎週1回は非常呼集があって、夜中にたたき起こされて完全武装でかけあしで出発する。

少しゆくと「敵は撃退されたから、これから帰る。ついでだから神宮に参拝する」とあって、伊勢神宮に毎週参拝となった。

しばらくして、占いの老翁の言葉を思い出した時には、心底から驚いた。

ガダルカナルから仏印へ

4ヶ月の訓練の終わりに、ここでも配属先の希望を出せ、と言われた。小生は学生時代フランス映画に夢中だったから、迷わずフランス領インドシナ（今のベトナム）に希望を出した。

400名の候補生は、満州、支那、内地な



どが多く、どんどん出てゆき、やがてガランとした兵舎に3名だけ残った。でも命令がないので、3名で本部に行き「自分たちはどうなっているのですか。」と聞けば、「お前らは希望はどこだ。」と言うので、「仏印です。」と言えば、「バカ、そんな所今どき行けん。」と言う。ポカンとしていると、「どこへでも好きな所へ行け」と言われた。

東京は空襲でダメだから途中の安全な所ということになり、静岡県と申し出たら磐田の聯隊への命令が出た。

知らないのは自分たちだけで、日本の敗北は決定的だったらしく、最後の決戦場である沖縄へ全軍を投入しつつあったのだ。

ところが京都で足止めされて8日間、市内をあてもなく歩いた後に列車に乗ると、神戸ではノロノロ運転となった。先日の大空襲で鉄道が吹き飛ばされて、急ごしらえのレールを行くと、わきの道路を歩いてい



る娘さんと話げできた。

「兵隊さん頼みます。」

「オーマかせとけ。」

下関の海底トンネルを抜けて九州に入り福岡を出たと思ったら、突然下車の命令。大宰府だった。

後で知ったのだが、沖縄が米軍に占領されたのだった。九州の人は九州だけで米軍と戦うと勇ましく叫んでいたが、夏休みの小学校に宿泊していた私達は、校庭に整列して、敗戦の天皇のお言葉を聞いた。

軍刀1本かついで、福岡県へ向かったものの、二日市の駅に着いたが、その日の列車はないので、駅のベンチにごろ寝していると、通りかかった奥さんが我が家に泊れ

と言うのでついて行った。

小さな家だったが、蚊帳を吊った寝床を与えられ、すぐ寝入ってしまったが、夜中に目を覚まして気付くと縁側で奥さんと

娘が並んで外を向いて座っていた。

あとで気付くと、ここは4畳半が1間きりで、小生が占領していたので、親娘は、とうとう寝なかったらしい。(つづく)

「わが人生を決定したもの」は通信44号から、4回連載したが、未完成のままの終了でした。今回掲載したのは「その1」で、「その5」以降は、筆が進まなくなったらしく中断してしまいました。でも、中村さんはその後も柏市のココファンでお元気で暮らしていた。通信が発行されると、中村さんには手渡しで届けようと俊春会長とココファンを訪問した。年に3回は訪問したことになる。徐々に目が見えにくくなったり、読むのが大変になったようで、ファイルに綴じるだけになった。

晩年は、会長や私のこともよくわからなくなり、悲しかったが、長南会の話をする、目を輝かして、しっかりとご意見を述べていたことが懐かしく思い出される。

青宿 秀則

和泉守・36土墓改修記念式典

2003'9/4 塩竈市寒風沢島

写真集



5



栽松記念碑除幕式 2003' 11/3 松島瑞巖寺



長南年恵勉強会 2004' 11/3 鶴岡市



長南年恵 100 年祭 2006' 11/3 鶴岡市



**長南忠春 800 年祭
2006' 7/7 宮古市田老**



丹波哲郎と語る会 2003' 11/18 東京



長南氏のルーツを語る会 その他



今年に入り、コロナ渦により、葬儀も家族葬が中心になり、訃報が遅れて届き、3人の相次ぐ訃報に接しました。中村さんの長南氏の研究で、自分の歴史を知り、なにかお手伝いできることがないかと考えて、ホームページ作成や、後に長南会通信の編集を担当させていただきました。各地の長南さんたちと交流ができて、有意義な時間を過ごさせていただきました。その中で、東京蒲田の斎藤武夫さんと塩竈市の長南勘一さんともお会いできました。皆様には大変世話になりありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

青宿 秀則

今年もお世話になりました。良いお年をお迎えください。

今年も残り少なくなりました。新型コロナウイルス感染症の今後の動向が依然不透明な中、うがい手洗い等、ご自分のできることを確実に実施し、感染しないよう、健康に留意され、良いお年をお迎えください。

来年もよろしく申し上げます。

